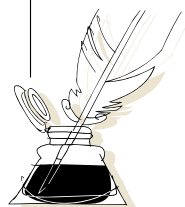


人生讃歌

舶来もの



いま、ちよつと出掛けるとき持つ小さな手提げバッグはグッチのものである。これは十二年前、スペインのバルセロナで買ったものだが、その理由が恥ずかしい。バルセロナの公園で休んでいるとき、持っていた安物のバッグを置き引きに盗まれ、仕方なくそばにあった店で妻の見立てで購入したものである。

ぼくは昔からおカネを得るのも使うのも才能がなく、おカネに縁が薄いから舶来ものについて感想を言える立場にない。ないが好奇心はあった。わが年代のせいかな舶来ものという言葉になじみがあつて、いろいろ複雑な思いが去来する。やはりおカネがなくて閉口して二十代、好みの女性がいる安スナックのカウンターに座っていた。支払いを少なくするため、ビールのコップを口へ持つて行かないよう、ひっきりなしに煙草を吸う。コップを空けると注がれるからである。ぼくが銜えた煙草に百円ライターで自分で火をつけたあと、すぐ横に座っている知らない男の客も自分の煙草に火をつける。シユワツという音のあと少し間を置いて店内にバチーンという蓋の閉じる音が響き渡った。ダンヒルのライターだ。カウンターのの中にいるぼく好みの女性が「すてき！」と言ひ、ぼくは顔を伏せ、そろそろ帰ろうかなと思ったものだ。非常に面白くなかった。

そのころぼくも、ちよつぴりだが腹の中ではロレックスやオメガの腕時計、オノトの万年筆やペンソンの時計、バーバリーのレインコートとかダンヒルやデューボンのライターの時計、あこがれてはいた。ま、小市民根性があったというわけだ。しかしどれも高価すぎるうえ手に入りにくく、ぼくが手を出せる代物ではなかった。それで男は見ただ目で勝負するものではないと居直り、舶来？そんなものと気持ちで頑張ったものだ。

ただ万年筆は別だった。中学二年のとき担任の先生に「日記は万年筆で書いたほうがいい」と言われ、一番安いパイロットの万年筆を買ったのはじまりである。二十歳ころ、有名な小説家がペリカンという万年筆を使っていると知つて欲しくなつた。そして二十一歳のとき、秋のボーナスの五万円を全部はたいてペリカンを買った。そのため下着も靴下も買えなかったが大満足だった。有名な万年筆で書けば、同人誌に載せる小説がよいものになるなどとはもちろん思わなかったが、とにかく気持ちが落ち着いた。

その後、何度かペリカンを買ひ替えたが、どうもペン先のすべり具合がなめらかでない気がした。ぼくの筆圧や手指の力の変化、書く速度や体調によるのかもしれない。それでモンブランやシエーファー、パーカー、ウォーターマンなど外国ものを使つてみたが、やはりペン先が紙面をこする感じが抜けなかった。

思うに、どの万年筆も英語やフランス語など文字を横に書いてゆく筆具で、ぼくみたいに日本語を上から下へ縦に書くのにはふさわしくないのかもしれない。それで結局、日本製のセーラー万年筆に落ち着き、その後、四十年使い続けている。

★

★

いま晝齋の机の抽斗^{ひきたし}をあけるとダンヒルのライターとパイプがある。四十歳のとき集英社の「すばる」編集長・松島義^{あししまぎ}と飲んだときである。彼はパイプ煙草をふかし、パイプもライターもダンヒルだった。そしてぼくも当時はパイプ煙草を吸い、巻き煙草も一日に九十本吸っていた。もちろんパイプもライターも安物だった。ぼくが松島義^{あししまぎ}が使う舶来ライターの蓋が開閉する音で煙草の味が上質になるとふざけると彼は「じゃ、これやるよ」とくれたものだ。

ただそのダンヒルを使いだしてから吸う煙草が二百本に増えて参った。考えの粗雑な者が銘柄品を持っても、ろくなこと



挿絵/中江潤一

にならない例である。ともあれ四十六歳のとき二日に百本煙草を吸い、ある日、五日続けて夜中に喉がふさがって咳^せき込み、死ぬのではないかと思うほど苦しんだ。以来、煙草をやめ、四十年間、二本も吸っていない。



着る物には興味がなく、服もワイシャツも黒っぽければいいという考えである。

腕時計のセイコーは二十歳ころから質草^{しちせう}として重宝^{ちゆうぼう}した。一万円のを十ヵ月月賦で買ったのが質屋で四千円も貸してくれて助かった。それで本を買い酒を飲んで気持ち前進した。三十五歳のとき勤め先の創立記念でもらったオメガの腕時計は、三十年使っても飽きなかったのは名品の証拠^{しんこ}だろう。六十歳のときスペイン旅行中、マドリッドの革製品^{くわせいひん}の老舗^{らうぽ}ロエベ本店で百五十周年記念として作った個数限定の腕時計を買った。保証書に発行番号がついてるのが田舎者のぼく好みだが、形の正四角、黒の文字盤、周囲の縁^{ふち}どりと二本の針と数字の白金色の対照が心のありように添^そっている。ぼくが持つ舶来ものの中では一番、意^いに適^あっている。これは現地で買ったが、ぼくは舶来ものと思っている。

それにしても最近、舶来という言葉が聞かなくなったが、これは国産ものが有名になつて外国へ輸出されているからなのか。あるいは外国から物を大きな船でなく飛行機で運んでくるからなのだろうか。ペリカンの万年筆を持って、これ舶来、とちよつと得意に思つた世代もぼくあたりでおしまいかもしれない。しかし島国に住む昔者^{むかしもの}としてぼくは、舶来とはなかなか風情のある情緒^{じゆうじゆう}ゆたかな言葉だつたと思う。遠い海の向こうの見知らぬ国の人々の生活に触れたようで、淡い旅情をおぼえたものである。